師匠と一夜

ワンナイト・ホラー　4

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18830470

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, モブ霊, 芹霊, エク霊, もぶお兄さん×霊幻, ♡喘ぎ, モ腐サイコ小説50users入り

ワンナイトしまくってる師匠が相談所のメンツにバレて泥沼化する話の４話目です。今回本番は芹霊のみです。なお攻めの倫理観がアレとなっております。お好きな方はよろしくお付き合いください。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

Table of Contents

ワンナイト・ホラー　４

ワンナイトやめればいいんだろ、やめれば。
本当に腹立たしいが、とりあえず俺があいつらに何をされているのかを突き止めないと、あいつらがもしかすると人の道を外れるかもしれない。
……それは避けたい。
仕事も終わり、みんなでラーメン食ってアパートに帰って、さあ寝ようとした俺は。
身体が疼いて眠れないのに愕然とした。
仕方なく抜く。おさまらない。人肌が恋しい。
〰〰〰っか、情けねぇ〰！！
完全にセックス依存症じゃねぇか、俺。
エクボの言う事が当たってたな。こりゃダメだわ。
俺は毎月性病の検査をしてくれてる夜間病院に電話して、事情を話す。
紹介して貰った歌舞伎町の夜もやってる精神科に疲れた身体を引きずって行って、診察してもらう。
性欲を減退させる薬と睡眠薬を貰って、へとへとになりながらアパートに戻った。
「一回３錠、と」
ペキペキと性欲減退薬の錠剤を押し出して、水道水で流し込む。
睡眠薬は寝る直前の方がいいな。明日の準備をしてから……。
ぴりりり、と携帯が鳴る。
……みーくんからだった。
「……どうした？」
少し躊躇ってから出る。どうしても期待してしまう自分に絶望する。
『霊幻さん、今から会えない？』
「今からか？明日の昼間じゃだめか？」
『色んなことがあったから、話したくって。昼間は俺、役所の人が探してきてくれたくもん？に通ってるんだ。だから今しか時間無

くって』
「……そっか。立派にやってるじゃないか。俺に報告の義務は無いんだぞ？」
『かあちゃんの事も聞きたいし、相談したいこともあるんだってば。相談料払うよ。ねぇ』
熱っぽい声に心臓が跳ねる。
『何もしないから』
「〜〜〜っ、分かった」
みーくんは話したいだけ。期待してるのは俺の方だ。俺が強い意志でもって誘わなければいい。そう思う俺の脳内に、こぽん、とみーくんのお母さんが酒瓶を傾ける音が響いた。
『じゃあ、いつものバーで』
「……バーの近くのファミレスでもいいか？」
『ん？いいよ』
なるべくそういう雰囲気にならないように場所を選ぶ。
話だけ聞いて、帰るだけだ。
何度も自分に言い聞かせる。
俺はスーツを着なおし、コートを羽織った。

※※※※※

〜２日前、Side芹沢克也〜

「はいこの話はおしまい！仕事だ、仕事」
霊幻さんにそう言われても、気持ちの切り替えなんかできなかった。
霊幻さんのワンナイトを目撃してから、心の中に暴風が吹き荒れている。
なのに、ワンナイトを指摘されても変わらない霊幻さんが、信じられなかった。
思えば霊幻さんに告白した時からそうだった。

想いを伝えれば、何か変わるかと思ったのに。

気持ちは嬉しい。でも俺はお前の事は部下としか思えない。これからも仲良く職場の仲間としてやっていきたい。

と定型文で断られて。
それでも食い下がれば、男は恋愛対象にならないとめんどくさそうに言われ。
それでも、それでも意識ぐらいしてもらえるんじゃないかと期待していたら。
まっっっったく態度の変わらない霊幻さんに、徐々に絶望させられた。
俺は霊幻さんに愛されている。大事にされている。それはヒシヒシと感じているが、それはあくまで部下として、知人として……友人として、だ。
それだけでもありがたいこと。分かってはいた。理解はしていた。
でも、みーくんとホテルから出てきた霊幻さんを見た瞬間に。
俺の本能の部分が叫んでいた。なぜそいつにヤラせた、と。
俺にはヤラせないのに、何故そいつには、と。
自分の醜い本性を知る。でもどうしようもなく、それは俺の本音だった。
フラれた、で済んでいるウチは良かった。同じように振られた影山くんやエクボくんと、苦笑して心の傷を舐め合うこともできた。
でもダメだ。霊幻さんが遊んでいると知ってしまったら、もう、抑えがきかなくなってしまった。
「おーい芹沢〜、きいてるかー？」
どういうつもりなんだろう、この人。こんなに無防備に俺の顔を覗き込んできて。
このまま唇を奪っても。
この人、抵抗しないのかな。
「芹沢、次の依頼は外回りだから、準備しろって言ってるだろ」
みーくんがやっていいなら、
俺だって……。

「芹沢？」
霊幻さんの薄い唇に視線が固定される。
奪うなら。
一瞬で。
ごくりと唾を飲み込んで。
「やめとけ」
エクボ君の声で正気に戻った。
「ただの部下だろ、お前は」
ワンナイトの相手じゃねぇ、と耳打ちされて、舌打ちしたくなる。
「今、行きます」
外回りのためにカバンを引っつかんで。
霊幻さんのワンナイトの相手になりたい。そんな詮無いことを、考えた。

※

「今日ラーメン食べに行かねぇ？せっかくみんな居るし」
にこにこと笑いながら言う霊幻さんに、信じられない、と目を疑う。なんでエクボ君と影山君が居るか分かってます？貴方の夜遊びを問い詰めるためですよ？

気まずいとか思わないんですか？

事情を知らない暗田さんはいいわね、と同意しているが、エクボ君と影山君は複雑そうな顔をしている。
この人ホントに。
俺たちの恋慕なんか、どうでもいいんだな。
「俺、は、ちょっと。締め作業しておきますんで、皆さんで行ってきてください」
笑顔が引き攣ってるのが自分で分かる。
「俺様もパス」
「ごめんなさい、僕も、今日は、ちょっと」
当然エクボ君と影山君も遠慮する。みんな引き攣った顔をしてい

た。
「そうか？じゃあ行くか」
霊幻さんは暗田さんを連れて出て行く。
「「「……」」」
残された俺たちは、誰ともなく目配せをして、一斉にため息をついた。
「なんなんだよ、アイツは」
「フれば恋愛感情が消えるとでも思ってるんだよ、師匠は」
エクボ君と影山君がボヤく。
「これだけ告白されてるのに、夜遊びなんてしてみせて、当てつけかな、って思っちゃうよ」
「ちげぇな。アレは病気だ」
エクボ君が足元に目を落としながら呟く。
「ニンフォマニアかセックス依存症か、病名は医者が付けるだろうが、毎日男漁りは異常だ。完全に中毒だよ。あいつはワンナイトをやめられない」
「でも師匠はやめるって約束してくれたよ」
影山君の声が震える。
「やめなかったら？」
エクボ君の残酷な言葉が影山君を傷付ける。
「俺たちにバレなきゃいい。そう思うかも知れないぜ？」
「そんな……師匠に限って……」
深く深く、弟子として愛されてきた影山君は霊幻さんを信じたくてたまらないのだろう。
でも俺たちの条件は一緒だ。みんな霊幻さんのセックスの相手としては見られていない。霊幻さんの身体目当ての有象無象に霊幻さんが抱かれるのを指を咥えて見てなくてはいけない、滑稽な同盟。
その条件は、影山君も変わらない。
いっそ霊幻さんを好きにならなければ、俺たちは霊幻さんを抱けたのだろうか。
いや矛盾している。基本的にヘテロだった俺たちは、好きにならなければ、霊幻さんを抱きたいとは思わなかっただろう。
ああ、ままならない。

思えば、霊幻さんが悪いんだ。あんな「愛してる」を隠さない瞳で見つめてきて、命懸けで俺たちを守ってくれて、大事に大事に育ててくれて、好きになるなって方が難しいんだ。
好きにさせておいて、突き放すんだから。
いつでも霊幻さんのそばには居場所がある。それがたまらなく心地良くて、それを絶対にしたくなる。
でもそこまでは踏み入らせない。霊幻さんはそういう人だった。
影山くんはその居場所に俺より長くいる。
重症度は、きっと彼が１番上だ。
「なあ、これは提案なんだが、霊幻がワンナイトできないようにしちまわねぇか？」
これは。
悪魔ならぬ、悪霊のささやきだ。
「アイツが俺たちとの約束を守れば何も問題は無い。だけど、破った時だけ……俺たちが霊幻を抱けるようにしちまおうぜ」
その提案は魅力的すぎて。
俺は頷くしかできなかった。
恥ずかしい話、「霊幻さんとヤれる」ってことしか、考えられなかった。
「よし、じゃあアイツを軽く呪おう。俺様の催眠だけじゃ不安だからな」
エクボ君が棚から半紙を取り出す。
客に出す茶菓子用の小皿に、墨汁を出す。霊幻さんがお札を作る時に使ってるやつだ。
「全員の血を墨汁に混ぜるぞ」
エクボ君が台所から持ってきた包丁を握って血を墨汁に垂らす。
包丁を念のため洗ってから、同じように俺、影山くんが墨汁に血を垂らした。
小筆で良く墨汁と血を混ぜて、エクボ君は達筆で半紙の下の方に
『霊幻新隆は影山茂夫、エクボ、芹沢克也が認識できなくなるよう、呪う』
と書いた。
「これが呪いだ。これだけでも効果があるが、条件を付けるとより

強力になる」
『条件』
と半紙の１番上に書いたエクボ君は、その下に
『霊幻新隆がワンナイトをしようとすること』
と書いた。
「これでいい。軽い呪いだから発動条件はこれで充分だ。あとはこいつに……」
「ねぇエクボ、僕も師匠を呪いたいんだけど、できる？」
エクボ君が影山君の言葉に躊躇う。
「俺も、呪いたい」
どうせなら、霊幻さんを。
「できるけどよ……」
エクボ君が何か言いたげに俺に小筆を渡す。
俺は、
『霊幻新隆が、芹沢克也、影山茂夫、エクボのものになるよう、呪う』
と書いた。
エクボ君が目を見開く。
「呪いが強すぎる！危険だぞ！？」
「霊幻さんが約束を守れば発動しない呪いだ」
低い声が出てしまう。
『条件』『霊幻新隆がワンナイトをすること』『霊幻新隆が芹沢克也を嫌いと言うこと』『霊幻新隆が影山茂夫を嫌いと言うこと』
『霊幻新隆がエクボを嫌いと言うこと』
条件を見てエクボ君が黙り込む。
「この条件なら、師匠が満たすことはまず無いかな」
影山君がほっとしたように言う。
「そうだよ。おまじないだよ、本当に」
「……条件を四つも付けやがって。かなり強力な呪いをかけたことを忘れんなよ」
エクボ君が心配そうに呟く。
「じゃあ、僕の番だ」
影山君は、

『霊幻新隆は××××××××××よう、呪う』
と書いた。
「シゲオ！それは神の領域だ。いくらなんでも……！！」
「僕ら３人で力を込めればできる。そうでしょう？」
「……それは、そうだが……」
「僕は師匠と幸せになりたいんだ。だから師匠を縛る枷が欲しい。……大丈夫だよ、エクボ。師匠が約束さえ守ってくれれば、成就しないんだから」
『条件』
『霊幻新隆がワンナイトをすること』
『霊幻新隆が芹沢克也と性行為をすること』
『霊幻新隆がエクボと性行為をすること』
『霊幻新隆が影山茂夫と性行為をすること』
『霊幻新隆が×××××××を了承すること』
『霊幻新隆の願いが叶うこと』
ことり、と影山君が筆を置く。
「こりゃあ、数もさることながら、内容が異常なほど高度だ。呪いと言うより祝福に近ぇぞ。正真正銘ヤバい儀式になる。シゲオ、お前、これが成就したら、人でなくなるかも知れないぜ──」
「かまわないよ。師匠と幸せになれるならね」
はっ、と諦めたようにエクボ君が笑う。
「お前が神や怪異に成っても、俺たちゃずっとダチだからな、シゲオ」
影山君が無邪気に微笑む。
ああ。
恋は人を外道にするなぁ。
「さぁ、呪いの儀式だ」
エクボ君が応接テーブルの上に「人」の形に３枚の半紙を並べる。
それを取り囲むように３人で円形に立って、手を繋ぐ。
「反時計回り順に力を込めながら、呪え。『霊幻、愛してるぜ』」
バシュウ、とエクボ君の霊体から力が半紙に込められる。
「師匠、愛してます」
影山君から、大きな力が半紙に流れ込む。

「霊幻さん、愛してます」
俺の身体から、ごそっと力が流れ込んだのが分かる。
「霊幻、好きだ」「師匠、愛してます」「霊幻さん、大好きです」「霊幻、愛してる」「新隆さん、好きだ」「新隆さん、逢いたい」「霊幻、愛してる」「師匠、抱きたい」「霊幻さん、大好きです」「霊幻、大事にする」「師匠、大好きです」「新隆さん、あなたは俺の光だ」「霊幻、お前のためになんでもしよう」「師匠、愛しています」「霊幻さん、あなたの望みは全て叶えてあげたい」「霊幻、愛してるぜぇ！」「師匠、大好きです！」「霊幻さん、愛してます！」「れぇ〜げん、好きだ！」「ししょう、だいすきです！」「れいげんさん、覚悟してください！」「れいげん、逃げられると思うなよ」「師匠、逃がしませんからね」「霊幻さん、逃げられませんよ」「霊幻、幸せにしてやるから」「師匠、幸せになりましょうね」「霊幻さん、俺と幸せになってください」「霊幻、おまえといたい」「師匠、そばにいてください」「霊幻さん、ひとりにはさせません」「れいげん、あいしてる」「ししょお、あいしてます」「れいげんさん、あいしています」「霊幻、デートしよう」「師匠、動物園行きましょう」「霊幻さん、俺んち来ませんか」「霊幻、抱きてぇ」「師匠、触れさせてください」「霊幻さん、セックスしたいです」「霊幻、おまえのそばにいたい」「師匠、あいたいです」「霊幻さん、おれのそばにいて」「霊幻、誰にも渡さない」「師匠、あなたは僕のものです」「霊幻さん、俺は諦めません」「霊幻、好きだ」「師匠、愛しています」「霊幻さん、大好きです」「霊幻、一緒に暮らそう」「師匠、同棲したいです」「霊幻さん、俺の家で暮らしませんか」「霊幻、犬でも飼おうぜ」「師匠、木を植えませんか」「霊幻さん、熱帯魚を育てませんか」「霊幻、指輪を贈らせてくれ」「師匠、指輪のサイズを教えてください」「霊幻さん、一緒に指輪を買いに行きましょう」「れいげん、しんでもだいじにするからな」「ししょう、しんでもはなしませんよ」「れいげんさん、かんたんにしねるとおもわないでくださいね」「れいげん、けっこんしよう」「れいげんししょう、けっこんしてください」「れいげんさん、おれといっしょになってください」「れいげん、きれいだ」「ししょう、きれいです」「れいげんさ

ん、きれいです」「れいげん、だいすきだ」「ししょう、だいすきです」「れいげんさん、すきです、だいすきです」「れいげん、おれさまの×××××××××」「ししょう、ぼくの×××××××××××」「れいげんさん、おれの×××××××××××」

ぶわ、と。
半紙から字が光りながら浮かび上がる。
くるくると踊りながら、列になりながら３枚の半紙から浮かび上がった文字は、窓からするすると出て行った。
「霊幻を呪いに行ったんだ」
手を離して、３枚の半紙を丁寧に四つ折りにしながら、エクボ君が言う。
「しっかし、お前らめちゃくちゃに力と呪いを込めやがって。ありゃあもうちょっとした怪異だぜ」
人のことを言えないくせに。
エクボ君は霊幻さんの机の引き出しを開けて、奥の方に半紙を隠す。
「こういうのは本人の近くに隠せれば隠せるほどいい。場所はここでいいだろう。滅多に奥まで開かないしな」
これで呪いは完成だ、とエクボ君が言う。
「さて。じゃあ霊幻が約束を守ってるかどうか、確認しに行かないとな」

※

コートの前を合わせながら、霊幻さんのアパートを見上げる。
しばらくすると、霊幻さんがアパートから出てきた。
「あいつ、ワンナイトするつもりだな。呪いが発動してやがる」
霊幻さんの周りにくるくると光る文字が絡みついて見える。
俺たちの前を素通りして、繁華街の方に向かって行った。
「本当に俺たちが認識できなくなるんだ……」
「そういう呪いをかけただろ？」
霊幻さんのあとをつける。

発展場のバーに入って。
カウンターに座る霊幻さんをテーブル席からテキーラサンライズと
というカクテルを舐めながら様子を見る。エクボくんはホーセズ
ネック、影山くんはＸＹＺというカクテルをそれぞれ舐めていた。
しばらくすると、霊幻さんの隣に短髪の男が座って。
霊幻さんとくすくす笑い合いながら、腰を抱いたり頬にキスしたり
し始めた。
ビキリ、と影山くんのグラスにヒビが入る。
浮気現場を初めて見た影山君からパキパキと超能力が漏れている。
「おい、背格好が似てる。芹沢、あの男と入れ替われ」
エクボ君が耳打ちしてくる。
俺たちは立ち上がって、霊幻さんがよろけた隙に男と入れ替わっ
た。
「！？」
驚いて文句を言おうとした男に、エクボ君が催眠をかける。
「お前はだんだんねむーくなーる」
ソファー席に座り込んで眠りこけた男を置いて、俺たちは霊幻さん
に誘導されるままラブホに行く。
詳しいんだな、霊幻さん……。
「俺たちは外の居酒屋で適当に時間を潰してるから」
エクボ君たちと分かれてホテルに入って。自分も服を脱ぎながら、
霊幻さんがスーツをハンガーにかけて脱いでいくのをドキドキしな
がら眺める。
「お兄さん、なんて呼んで欲しい？」
話しかけられてびくっとしてしまう。
「……克也」
思わず欲望が出てしまった。大丈夫だろうか。
「克也かぁ。俺のことは新隆って呼んでくれていいよ」
大丈夫だったみたいだ。ふにゃふにゃ笑う霊幻さんが可愛い。
「新隆さんっ」
思わず抱きしめて口付ける。
「んぁっ……、ふ、ぅんっ……」
甘ったるいカクテルの匂いを自分のにおいで上書きするように口の

隅々まで追っていたら、霊幻さんが一歩後ろに下がった。
「はぁっ……」
慌てて口を離すと、トロンとした酸欠の霊幻さんがいて、悩ましかった。
裸の身体をまさぐりながら、首筋に唇を押し付けていく。
「ぁんっ！キスマーク付けんなよ、マナー違反だぞ！！」
思わず強く首筋を吸い上げてしまった。
「すみません、たまらなくて」
ベロリと首を舐め上げてなんとか口を離し、ベッドに押し倒す。
きめの細かい白い肌が興奮でうっすらピンクに染まっていて、初めて眺める霊幻さんの裸体は、くらくらするほど扇情的だった。
「綺麗だ……」
「んふ……ありがと」
妖艶に霊幻さんが吐息を漏らす。
「克也も、おっきくてカリが張ってて……かっこいいよ♡」
「……っ」
霊幻さんの甘ったるい声に、リップサービスだと分かっていても愚息が反応する。
「ほぐしてるから、もう挿れてくれてもいいぞ♡おっきいのでガンガン突かれたい気分なんだよ」
「い、いいんですか？」
慣らしとかしなくてもいいんだろうか。霊幻さんが俺のを見ながら舌舐めずりしたのにどきりとする。
「そんなにガチガチにしてガマン汁ダラダラ垂らしてるの、一発早く出したいだろ？」
「……っす」
興奮でクラクラする。震える手で開けようとするコンドームが上手くいかない。
「つけてやるよ」
そうこうしていたら、霊幻さんが口で咥えてするするとフェラしながら着けてくれた。
……慣れてるその姿に、ちくりと胸が痛む。
抱けたとしても。

俺だけが、霊幻さんを手にした訳じゃない。
「霊幻さん、挿れますね」
「うんっ♡」
でも、性欲が勝つ。
みだらに乱れる霊幻さんに、もう我慢するなんて選択肢は無かった。
「あぁっ♡」
ずぶ、と先端を挿れる。
あつい……っ、気持ちよくて、もう、出そう……。
「もっとぉっ♡♡」
「……っ、霊幻さん、気持ちいいですか？」
ダメだ、バリアを張ってイカないようにしよう。
「きもちいっ♡♡克也のおちんちん、さいこうっ♡♡」
「……っ、嬉しいです」
ず、ずぶ、と気遣いながら挿れる。と、じれったかったのか、霊幻さんが足でぐっと俺の腰を抱きしめた。
「あぁ……っ♡」
ずどん、と奥まで一気に挿れてしまい、ひくん、と霊幻さんが跳ねた。はぁはぁと興奮を味わっていて、気持ちよさそうだ。
「愛してます……好きです、霊幻さん」
あ。
俺、今、童貞捨てた。
ぶわっと霊幻さんへの愛しさが込み上げてきて、涙がぼろぼろ出てくる。
ありがとうございます、俺の童貞貰ってくれて……っ。
「いいねぇ、盛り上がるじゃんっ♡俺も好きだよ、克也♡♡……ぁんっ！」
たまらない。腰が止められない。髪を振り乱して喘ぐ霊幻さんの姿に息を荒くしながら、間抜けに腰を振り続ける。
「克也ぁっ♡イイっ♡♡もっと犯してぇっ♡♡ああっ、あっ♡」
激しさに霊幻さんが背中に爪を立ててきたが、すぐ手を離してくれた。
優しい人だ。

「ごめっ♡ごめんっ♡♡」
ぼたぼたと精液をこぼしながら快楽に喘ぐ霊幻さんが可愛い。
「いいですよ、気にしないでください、霊幻さん」
「優しいっ♡♡克也のこと、結構好きかもっ♡♡」
「かも、じゃなくてっ、好きになって、くださいよっ」
ひくん、と霊幻さんの腹筋がひきつる。限界が近いのかな。
「好きぃっ♡好き……克也のチンポ大好きぃっ♡♡〜〜〜〜〜〜〜っ♡♡」
霊幻さんが突然身体を縮めて、ビクンビクンと跳ねる。
「ぐぅっ」
ナカがぎゅるぎゅるうねってイキそうだ……っ
「あっ♡あっ♡また、イくっ♡♡」
何とか耐えてズンズンと抽送を続けると、霊幻さんの喉から悲鳴みたいな声が漏れた。
ヨさそうだ。
「好きなだけイッて下さいよ。俺はバリア張ってイかないようにしますから」
「何っ♡それぇっ♡」
ぐい、と霊幻さんに肩を引かれて、はむ、と耳たぶを唇で食まれた。
「克也もぉ……♡いっしょに、イこ♡」
ぶるりと震えて、バリアを張っていたのに思わずイってしまった。
じわんとした渦巻く熱に、ガクガク腰が震える。
「いっぱいでたぁ……っ♡」
うっとりと乱れる霊幻さんが美しい。
「あ、ぁあ……っ♡」
俺をかき抱きながらまた襲ってきたらしい大きな快感に耐える霊幻さんは、水晶みたいな涙を零してびくんびくんと足を跳ねさせる。
「破壊力ヤバすぎでしょ……」
俺の手で乱れる霊幻さん、最高に可愛い。
だめだ、これ。
ハマる。
「もっかい、いいですか」

上がる獣みたいな息を隠さず、新しいコンドームを開けようとする。手間取っていたら霊幻さんがサラッと開けて装着してくれた。
「いいよぉ、でもバックがらくだからこっちな……っあん♡」
四つん這いになった霊幻さんの背中に覆いかぶさって、首筋や背中を舐めながら腰を打ち付ける。
「さいこうっ♡イイっ♡はぁんっ♡♡」
だらしなく俺の性器を味わう霊幻さんに、感動すら覚える。
「克也ぁっ♡もっとぉっ♡」
びゅくびゅくと射精を味わっていたら、フラフラと霊幻さんが腰を揺らして、頭の血管がぶちぶちと切れる気がした。
慌ててゴムを付け替えて、また霊幻さんに挿入する。
「きたぁっ♡デカマラさいこうっ♡♡イくぅっ♡♡♡」
次は霊幻さんが勢いよく射精する。
可愛い。
可愛い。
可愛い。

結局霊幻さんが気絶するまで、興奮がおさまらなかった俺は、抱き潰してしまった。
すうすう眠る霊幻さんを腕の中に抱きしめて。
「幸せだ……」
頬擦りした俺は、少しだけ感極まって泣いた。

※

「さすがに懲りたんじゃないですか？」
ふわふわと満たされた気持ちで俺はエクボ君と影山君に話しかける。
「さぁなぁ。アイツ病気だからな」
エクボ君が何でもないような感じで言う。
「とにかく今夜も見張ろう」
影山君の言葉に、俺はふわふわしたまま頷く。

霊幻さんを抱いた幸福感が、ずっと俺から離れてくれなかった。

注※気が付いてないようですが、薬や催眠で前後不覚にして行われた性行為は、非同意、強姦にあたります

続